

万葉図書・情報室だより43号

『万葉集』と『懐風藻』

日本最古の歌集として有名な『万葉集』は、年代のわかる最後の歌が天平宝字三(七五九)年の歌であることから、奈良朝末期以降の成立とされています。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、『万葉集』成立当時はまだひらがなはなく、歌を含めた日本語はすべて漢字だけで書かれていました。これが何を意味するかといいますと、奈良時代当時の人々は、中国から大量に受け入れた漢字・漢文の意味を、きちんと理解していたということです。その中国から受け入れた大量の漢字・漢文の知識を結集して作られたのが、日本最古の漢詩集『懐風藻』です。その序文によれば、成立は天平勝宝三(七五二)年とされていますので、『万葉集』よりも早くに作られた漢詩集ということになります。この『懐風藻』は、記紀万葉と同時代の作品であるにもかかわらず、あまり注目されてこなかった作品です。その原因は、『懐風藻』に収められている作品が、中国の詩の模倣が多いというマイナスの評

価を下されたことによりです。たしかに、『懐風藻』には中国詩に学んだと思われる表現を多く目にします。ですが、漢詩は中国から入ってきた新しい文学の形式であり、いわば外国語で詩を作るということになります。当然、本家中国の様々な詩を学び、自分たちの表現を獲得するまでにはある程度の時間が必要です。模倣の表現が多いからといってその評価をおとしめることは、あつてはならないことです。

最近では、奈良朝の文学と中国文学との関係に目を向ける研究が増え、『懐風藻』も注目を集めつつあります。その中から、今回は大津皇子という人物の作品をご紹介します。大津皇子は天武天皇の皇子で、文武に秀でた優れた皇子であったと伝えられています。彼は皇太子・草壁皇子に謀叛を起こした罪で処刑されています。その大津皇子は、『懐風藻』に四首の詩を残しています。

大津皇子「七言 述志」
天紙風筆雲鶴を画き
山機霜杼葉錦を織る

〔『懐風藻』詩番六〕

この詩は、天を紙とし、風を筆として雲の鶴を描き、山を機織りとし、霜を糸通しとして、葉の錦を織ると詠まれています。自然をキャンバスに見立てた、雄大な詩です。この詩の二句目には、色鮮やかな黄葉の景が詠まれています。黄葉を織る」という表現は、中国詩には殆どみられない大津皇子独自の表現です。しかも、黄葉を極彩色の「錦」とする発想は平安時代の和歌には多くみられますが、奈良時代には殆どみられず、その先駆がこの大津皇子の詩ではないかと思われるのです。

ちなみに、大津皇子は『万葉集』に「経もなく緯も定めず少女らが織れる黄葉に霜な降りそね」(巻八・一五二二)と、秋の山の美しい黄葉は、おとめたちが縦糸も横糸も定めずに織ったのだと詠んでいます。同一作者の詩と歌に、同じ機織りをモチーフにした黄葉の美景を詠む作品が存在することは、詩と歌の世界に何らかの交流関係があったことを匂わせます。そう、古代日本は既に模倣の時代を抜けて、新しい詩と歌の創造の時代に向かっていったのです。(主任技師 大谷 歩)

○新着図書案内○

- ☆萬葉悲別歌の意匠 (平館英子／塙書房)
- ☆日本書紀の形成と諸資料 (遠藤慶太／塙書房)
- ☆秋里離島と近世中後期の上方出版界 (藤川玲満／勉誠出版)
- ☆古代をあゆむ (笹山晴生／吉川弘文館)
- ☆ 基 (吉田靖雄／ミネルヴァ書房)
- ☆語り継ぐ古代の文字文化 (犬飼隆・和田明美／青蘭舎)
- ☆『四天王寺縁起』の研究 (榎原史子／勉誠出版)
- ☆森野旧薬園と松山本草 (高橋京子・森野薫子／大阪大学出版会)
- ☆よりすぐり国立国会図書館―竹取物語から (国立国会図書館／勉誠出版)
- ☆春日大社文書 (財団法人春日顯彰會)

利用案内



- 開館時間―午前10時～午後5時半
- 休館日―月曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始・展示替日
- 図書室のご利用は無料です
- 閲覧でのご利用になります。
- コピーサービス 白 黒一枚 10円
カラー一枚 50円
- 奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室
- 奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇
- 0744-54-1850(代)